
とある魔術の転生者

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の転生者

【Zコード】

Z6835T

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

突如押しかけた銀行強盗によつて妹共々虐殺されてしまった主人公、天翔希望。しかし、そんな彼の境遇を悲しんだ神様は希望を『とある魔術の禁書目録』の世界へと転生させる。亡き妹との約束を守るため、『必要悪の教会』の魔術師兼常盤台中学特別講師の希望は今日も学園都市中を駆け抜けていく。『ミサカ00000号』助けたり超電磁砲組と仲良くなつたり御坂美琴の義兄になつたり、とにかく原作を引っ掻き回す作品です。コラボなど、お待ちしています。

プロローグ（前書き）

「んにちは。禁書目録の一次創作を書きました。
これからよろしくお願いします。

プロローグ

少年は、どこにでもいるような極普通の一般人だった。あえて人と違うところを上げるとするなら、小さい頃に両親を交通事故で亡くし、妹と一人で日々を生きているという身の上ぐらいのものだろう。

少年自身も、両親との思い出をあまり覚えていないため、それほど悲しむようなこともなかった。自分より二つ年下妹もまた然り。生活費に関しては、国から出される生活保護金や親戚からの援助もあり、そこまで苦労はしておらず、兄妹揃って学校に通うことも達成していた。

多少のハンデがあるものの、少年と妹はお互いに励まし合い、平和に過ごしていたのだった。

しかし、彼らの平穏はある事件をきっかけに音を立てて崩れることとなる。

それは、ある春の日のことだった。

少年は、この春に高校生となる妹の入学準備をするため、兄妹揃つて銀行を訪れていた。

休みがある度に入れていたバイトのおかげで、少しの金銭的不安もなく妹の制服や教科書などの学業セットを揃えることができるようになっていた。

入学シーズンのせいかいつもよりかなり長めの行列に並び、新しく始まる高校生活に頬の緩みが止まらない妹を少年がからかっている。周囲の人々も、そんな兄妹の微笑ましい光景に暖かい視線を向けていた。

そんなとき、銀行の自動ドアが開き、五人ほどの男達が列をなすよにして入ってきた。特段怪しい格好でもない、それぞれが現代

風のラフな服装だつたため、視線を向けていた人々はすぐに自らの日常へと目線を戻そうとした。…………が。

パン、と無機質な音が室内に響き渡り、同時にカウンターの上に置かれていた花瓶がけたたましい音を立てて破裂した。銀行内は沈黙に包まれ、人々の視線が音源へと集まる。そう

『やついた笑いを浮かべながら、煙をあげる拳銃を持つた男達へと。』

掴みはバツチリ、と言わんばかりな笑顔を浮かべた男達は、淡々と人々へと告げた。

『あー、今ので大体予想は付いてるとは思うんだけどお……俺達、銀行強盗つす』

パンパン、と一発の銃声が鳴り響く、それは混乱し、逃げ惑おうとしていた人々を鎮めるには十分すぎる脅しだった。

『お兄ちゃん……怖いよ……』

『大丈夫。じつと静かにしていれば、怖くなんかないよ。兄ちゃんがついてるからさ』

突然の事態に処理が追いつかず、精神が疲労しきつている妹を励ますかのように少年は妹の頭を撫で続ける。

その間も強盗による演説は続いていた。

『こつちもさあ、別に人殺しにはなりたくないのよね。とりあえず、さつさとアタツシュケース……あるよね？ それに金を詰めてくれないかな？ 急いでくれないと、閻魔大王の仕事が一つ一つ増えることになっちゃうよお？』

『ギャハハハ、と下卑た笑い声を上げる強盗集団。人々は、恐怖に慄きながらも警察が来る』ことを信じてただひたすらに耐え続けている。……そして、

悲劇のシ『』ョーが幕を上げた。

『お？ 嫁ちゃん、なかなか可愛いじゃねえか』
『ひつ！』

突然、強盗の一人が、少年の妹に目を付けたのだ。
妹はびつじていいか分からず、双眸から涙をためどなく溢れさせている。

妹の身の危険を感じ、少年はその男へと叫んだ。

『やめろ！ 妹には手を出すな！』
『ああ？ おお、いいねえ。これぞ美しき兄妹愛つてか？』
『妹は関係ないだろ！ お前たちの目的は金じやないのか！』
『もちろん、金だぜ？ でもよ……どうやら欲しいもんが増えちまつたみたいだわ』
『お前ら……！』

少年がギリリと奥歯をかみしめる。
男はそんな少年を鼻で笑い、妹へと手を伸ばした。

『さあて、嫁ちゃん。向ひつでお兄さんと気持ちいい』ことをしようつ
か』
『ひつ！ い、嫌……。お兄ちゃん、助けて……』
『ギャハハハハ！ お兄ちゃん、だつてよ。よかつたなあ、兄思い
の妹で』

『いの……野郎！』

怒りが頂点に達した。少年が全体重をかけて右腕を振り切る。同時に、ゴツという鈍い音が男の方から聞こえた。見ると、男の鼻から大量の血が流れ出している。

一瞬、状況の掴めなかつた男だが、すぐに自分の出血を把握すると、少年の腹に拳を叩きこんだ。

『ぐ……が……』

『お兄ちゃん！』

『おお、痛つてえ……。兄ちゃん、よくもやつてくれたなあ、オイ。もういい、気が変わつた。お前もコイツも一人仲良くあの世へ送つてやるよ！』

チャキ、と少年のこめかみに銃がつきつけられる。予想外の展開に周囲の人々が一斉に騒ぎ立てた。

『おい！ そんな子供になんてことしてんだよ！』

『お前らにだつて良心の呵責つてもんがあるだろ！』

『お願ひ！ その子たちは助けてあげて！』

『……ああ？ てめえらから殺されたいのか？』

男はもう一方の手に拳銃を持つと、騒々しい人質達へと銃口を向けた。途端に喧騒が收まり再び沈黙が訪れる。

人々の素直な反応に満足したように頷くと、男は少年に向かって銃の引き金に手をかけた。

『さあて、走馬灯とやらは見れたか？ 坊主』

『くつ……』

『お兄ちゃん、ダメ！ 死んじや嫌だよ！ お兄ちゃん！』

『「つるせえガキだな……。安心しろ、すぐに坊主と同じとりに行
けぬぞ。……それじゃ、あばよ、妹思いの命知りすか』

タアアアンッと無慈悲な銃声が鳴り響いた。

人々から悲鳴が上がる。少年は、為す術もなく床に崩れ落ちた。

『イヤ……イヤ……お兄ちやああああん……』

『……よし。そんなにお兄ちゃんと一緒にがいいなら、ひとつと逝か
せてやるよー』

『や……め……る……』

『残念。そりや聞けねえお願いだわ』

一発目の銃声が鳴る。

失われていく視界の中で、最後に少年が見たものは、無情にも無
残な肉塊へと成り果てた愛する妹の姿だった。

プロローグ（後書き）

感想、お待ちしています。

プロローグ 〈別れ〉（前書き）

次回から本編です。

プロローグ 『別れ』

沈黙。

ただそれのみがすべてを支配する世界、空間。その空間に、一人の少年が浮かんでいた。……いや、浮かんでいたという表現はおかしいかもしれない。少年は空中に寝転がされていた。

「…………う…………」

少年が目を覚ます。

何故か意識がボンヤリしていて、よく思考を纏めることができない。

混濁する意識の中、少年はふりつきながらもなんとか立ち上がった。

「…………う…………？」

見知らぬ世界。欠片も懐かしさを感じない空間。ただひたすら『白』に包まれた部屋。

そんな非常識に囮まれたからだろうか、少年の意識がゆっくりと正常化していく。……同時に、記憶が蘇る。

『あー、今ので大体予想は付いてるとは思うんだけど……俺達、銀行強盗っす』

『大丈夫。じつと静かにしていれば、怖くなんかないよ。兄ちゃんがついてるからさ』

『やめろー。妹には手を出すなー』

『ひつ！ い、嫌……。お兄ちゃん、助けて……』

『や……め…………る…………』

そして、肉塊となつた妹の姿までもが頭の中に再生された。

「わたくしはおまえのことを知りません。」

少年が頭を押さえうずくまる。耐えられなかつた。十七年間、自分の全てを預けることができた愛する妹の変わり果てた姿など、耐えられるはずもなかつた。

息も絶え絶えに何かに向かつて訴え続ける少年。
その姿は、全てを失い、為す術もないま、ただ壊れ続ける人形
のようだった。

「…………お兄ちゃん」

そのとき、空間に一つの声が響いた。反応するよつこに少年の顔がそちらを向く。

そこでは茶髪を肩の辺りで切り揃えた一人の少女が、少年に微笑みかけるようにして立っていた。

「聖ひじり……！」

「うそ、そうだよ。お兄ちゃん」

今まで、何度も見てきた妹の笑顔。それに触発されるように少年

は妹の名前を呼んだ。……お互いが、既に死んでいることに微塵も気付かずに。

少年が聖の方へと足を進めようとすると、……が、なにか見えない壁に阻まれたように、そこから動くことができない。

「聖！ 聖！ くそつ！ なんで進めないんだよ！」

「無理だよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんと私は、今、違う世界に存在しているんだから」

「…………え？」

ピタリ、と少年は必死に動かして止めた。そんな兄の様子に、聖は悲しそうな表情で淡々と告げた。

「信じられないかもしないけど、聞いて。私とお兄ちゃんはついつき、あの銀行強盗に殺されたの。それでね、本来ならそのまま天国とか地獄とかに行つて、それぞれの対応をしてもららうんだけど……一人の女神様が、私達の人生に同情したらしくて、違反を承知で、意識と記憶を残したまま別の世界に転生させてくれるんだって」「転生……？ ちょっと、ちょっと待つた！ なにがどうなってるんだよ！？ 僕達は死んでるんだろ？ ジャア、なんで今こうやって話しているんだよ！？」

全く状況が掴めずに躊躇う少年。

聖は言葉を続けた。

「うーん……なんて言えばいいんだろ。今私達は、魂がそれぞれの道に進む準備段階に入っている状態なの。お兄ちゃんは転生へ、そして、私はあの世へと」

「…………え？ 今…………なんて……」

聖の言葉に、動搖を隠せない様子の少年。少女は同じ言葉を呟いた。

「お兄ちゃんは、別の世界で転生するために。私は、あの世での審判を受けるために。それぞれの魂が準備段階に入っているの」「なんで……だよ……。なんで、転生するのが『俺』なんだよ……。」「なんで……だよ……。なんで、転生するのが『俺』なんだよ……。」

少年が、不可視の壁に手を叩きつけながら吼える。

「お前の方が全然ふさわしいじゃねえか！　俺よりも短い人生だつたし、俺なんかよりもよっぽど惨めな思いをしてきただろう！？　それに、俺はお前にも幸せな人生を歩んで欲しいんだよ！　それなのに、なんで……」

「ダメだよ、お兄ちゃん」

聖は悲しそうに笑いながら、お互いの境界線へと足を進める。少年はただ呆然と聖を見つめていた。

「私ね、お兄ちゃんが思つてているほど、良い人間じゃないんだよ？」「……どういう意味だよ……」

「お兄ちゃん、不思議に思わなかつた？　自分がバイトで稼いだ合計額よりも、多めの金額が通帳に入つていたこと。あれね、私が稼いだんだ」

「…………お前、が？　でも、どうやって……」

「うん、だからね。私みたいな中学生でも稼げる方法で。えーと、簡単に言わせてもらつと……」

聖は、瞳の奥に宿る光を完全に消し、言い放つた。

「世の中の男の人に、私の身体を買つてもらつたんだ」

「つー

少年が、体を強張らせる。自分の妹がそんなことをしていたなんて、信じたくもなかつた。しかし、それでも聖は少年の気持ちを搖さぶり続ける。

「私、必死だつたんだよ？ お兄ちゃん、私の為に自分のすべてを犠牲にしようとするからさ。まあ、とある小説だけは、全巻買ってみたいだけ。それでね、お兄ちゃんが身を粉にしてまで生活費と学費を稼いでくれているのに、ただ見ていることしかできない自分が悔しくて、情けなくて仕方がなかつた。でも、考えたの。お兄ちゃんを少しでも楽にするために、この身体を使おつってさ」

「馬鹿、野郎が……そんなこと、する必要が

「だから、こんな汚れきつた私なんかより、私の為に人生を棒に振つた、お兄ちゃんを救つてほしいって女神様にお願いしたんだよ」

「……でも、それでも、俺は

「お兄ちゃん」

ただ一言、聖は兄の名前を呼ぶ。その瞳にはいつからか強い意志の光が存在していた。

「どうしても、私を尊重したいなら、私の言つことを聞いて。私の願いは、お兄ちゃんに転生してもらひこと。それだけなの。お願ひだから、一回ぐらい、私にも恩返しをさせて……ね？」

「聖……お前……」

「…………ゴメン、お兄ちゃん。もう時間みたい

「え？ うわっ」

少年が軽い叫び声をあげる。いつの間にか、お互ひの身体が光の粒子に変わつていつていていた。

「聖！」

「お兄ちゃん！ 最後に、私からのお願いを聞いて！ 転生したら、
その世界でできるだけ多くの人達の命を救つて。それと、絶対に私
のことを忘れないで……」

「ああ！ 分かったよ…… 聖！」

少年が、必死に妹の名前を呼ぶ。聖はすべてをやりきったような
安らかな表情をしていた。

「聖！ 聖！」

「………… わよひなう、お兄ちゃん」

一人の全身が完全に粒子へと変わる。
これが、お互いを愛した兄妹の最後となつた。

そして、少年
『^{あまかけ}天翔^{のぞむ}』の第一の人生が、幕を上
げる。

To be continued.....

プロローグ『別れ』（後書き）

感想、お待ちしています。

プロローグ『御坂未来』（前書き）

こんにちは。今日もあなたのそばでこいつ そりあなたを見守っている
ふゆいです。

今回もプロローグというタイトルですが、今までとは少し違う感じ
かな？

とにかく、お楽しみください。

プロローグ『御坂未来』

薄暗い古びた研究所。そこで少女は作られた。

少女の検体番号は『ミサカ00000号』。

学園都市第三位、『超電磁砲』のDNAマップを元に軍用兵器の試作機として生み出された、御坂美琴のクローンだ。

『量産型能力者計画』などというくだらない計画によつて科学の英知を結集した彼女の役割は、よりよく完全な『超能力者』を量産するための実験素材。

そう、ただ、それだけ。

少女を支えている存在価値など、たつたそれだけの儚く脆いものだつた。

そして……今日も実験が始まつた。

『生体電流に異常は無いようです。どうしますか?』

『もうすこし培養液の濃度を上げる。低酸素状態での活動記録をつけるぞ』

『了解です』

助手と思わしき男の手によつて少女の周りの酸素が減つていく。少し息苦しくなつてきたのだが、彼らがそんなことを気にするはずもない。

『心拍数、脈拍数、僅かですが上昇しています』

『構わん、まだ許容範囲内だ。続ける』

『わかりました』

さらには濃度が上がっていく。少女には限界が近づきつつあった。薄れていく意識の中で、少女はこんなことを思っていた。

(私は……これからも、この実験を永久に続けていくことになるのでしょうか……?)

それは、今まで何度も思った自分への問いかけ。
軍用クローンの試作機フルチューニングとして生まれた、自分なりの唯一の考え。

……しかし、たとえこの実験が中止になつたとして、少女には行く宛もない。どこかの路地裏で力尽きてしまつのが関の山であろう。それが、実験素材として作られた彼女の運命だった。

(わたし、は、ミサカ、は……)

酸素欠乏によって、少女の意識が闇の中へと沈んでいく。
……そんな時だった。

バコオノンッ！ といつ爆音とともに研究所の重く堅苦しい扉が粉砕されたのだ。

『なんだ！？ 一体何事だ！』

『わかりません！ 正体不明の爆発がいきなり発生しました！』

混乱し、状況が掴めていない科学者達。それは少女も同じだった。

(一体……どうしたんでしょうか……?)

爆発の弾みによって、少しづつ濃度が下がっていく培養液に安心

しながら、少女は破られた扉の方を見ていた。

煙が晴れる。

そこには、険しい顔で研究者たちを睨んでいる一人の男女がいた。

『だ、誰だ！ 貴様らは！』

研究者の一人が彼らに向かつて月並みな台詞を叫ぶ。

彼らは淡々と言い放つた。

『誰つて……ただの『超電磁砲』と』

『通りすがりの魔術師だ』

「……い」
「……らい」
「……ううん……」
「未来！」
「ひやいっー？」

突然の耳元での騒音によつて、少女の身体がビクンと跳ねる。慌てて目を覚ますと、目の前には呆れた表情をした少年が少女を見下ろすように立つていた。

「あ……おはよー」ひこです。希望
「おはよー。……また、あのときの夢を見たのか？ 隨分とうなされてたぞ」

少年 希望が心配そうな声色で少女を見つめる。その視線に僅かに顔を赤らめながらも、少女は思考を纏めていた。

（ああ……また懐かしい夢を見ちゃいましたね……）

夢、というのは冒頭のあの場面のことである。

二人が研究所に入ってきたことは、今でもはっきり覚えている。

あの後、一瞬で科学者たちを葬つた二人は、少女を培養液から解放し、助け出した。

少女には、意味が分からなかつた。何故、見ず知らずのこの一人は自分なんかを助けに来たのだろう。ただそれだけを考えていた。しかし、二人は言つた。

『俺は……ただ、可哀想な美少女とのフラグを立てたかっただけさ』
『私は、可愛い妹が酷い目に合つているのを見過ごせなかつただけよ』

それだけ。たつたそれだけの理由で彼らは危険を冒してまで少女を助けに来たのだ。

そして、彼らは少女を『実験素材』から、『一人の人間』へと存在を変更させた。……そう、少女に『名前』を付けたのだ。

『お前は今日から、『御坂 未来』だ』

そのとき、少女は確かに自分の心が晴れるのを感じた。自分の中に、一つの存在が生まれるのを感じたのだ。

それからはトントン拍子だった。

『お姉様』^{オリジナル}とその家族に引き取られた少女は、美琴の双子の妹として家族の一員となり、美琴と同じ『常盤台中学』にも通うことになった。身の回りの世話は、常盤台中学の特別講師である『希望』がしてくれ、普通の人間と同じ生活を送れるようになったのだ。

……そして、今に至るのである。

「ほら、とつとと飯を食え。急がねえと遅刻するぞ?」

「あ、はい。ありがとうございます」

「礼はいいから。早く用意しろよー」

そう言つて、台所へと歩いていく少年

天翔希望。

あの時、未来を助け出した少年である。十七歳という本来なら高校に通わなければならない年齢にも関わらず、何故か常盤台中学の特別講師をしている。しかも、彼は学園都市の人間ではない。英国の『必悪の教会』という所に所属している『魔術師』なのだ。

最初は全く信じられなかつたが、実際に『魔法』を見せてもらつたことで、信じるを得なくなつた。……そんな、謎の多い少年である。

希望が作つてくれた朝食を片付け、制服へと着替えを始める。

そのとき、コンコンと扉がノックされた。

「未来ー、学校行きましょー」

「朝から元氣ですね、お姉様」

開かれた扉の先にいたのは、御坂美琴。未来のオリジナルであり、双子の姉だ。常盤台のエースと呼ばれるほどの実力者だが、最近の

噂によると、とあるシンシン頭の少年に惚れているだとかなんとか。鞄を持ち、美琴の待つ玄関へ向かう。二人を見送るため、いつのまにか希望も玄関に立っていた。

「美琴、また学校で暴れるんじゃねえぞ？」

「分かつてるわよ！ 少しは義妹を信じなさい！」

「へいへい。未来、今日も頑張ってな」

「はい」

いつも通りの朝の風景。これが、未来の幸せな人生。ポカポカする心に頬を緩ませつつも、未来は希望に向かってお決まりの台詞を言った。

「それじゃ……行つてきます」

プロローグ『御坂未来』（後書き）

感想、お待ちしています。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）（前書き）

お久しぶりです。

やつと本編に入りました。更新速度は亀ですが精一杯頑張ろうと思
います。

それでは、どうぞ。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）

「行つてきまーす」

未来はそう言ひつと美琴と共に部屋を出た。希望はそれを見送るといつものようにテレビの前に腰を下ろす。

常盤台中学特別講師である希望だが、所詮無能力者であるためそこまで仕事はない。唯一ともいえる授業だつて超能力とは一切関係のない科目だ。

そのため、同年代の人達に比べるとやや退屈な日常を謫つているのだった。

（今日もどつあえず部屋で過ぐんやつ……）

そんなことを思いながら備え付けのテレビのリモコンを持ち上げた時だった。

突然、コンコンと玄関のドアがノックされ、希望の返事を待たずに何者かによつて開かれたのだ。

希望が氣怠そうに玄関の方を覗く。それと同時に希望へと飛びついてくる謎の物体。

咄嗟の出来事に何の対策も立てられなかつた希望は為す術もなくフローリングの床へと呑きつけられた。

「いつてえ……」

「あ、ごつめへん。もうちょっと抵抗すると思つてたんだけじれあ……ま、許してね。てへつ」

「…………」

希望の身体に跨つたまま右手の人差し指を頬に当てアイドルのよ

うなポーズをとる金髪の少女。その姿を見て、希望は幸せが一気に吹き飛んでしまいそうなほどため息をついた。

「またお前か、食蜂……」

食蜂操祈。常盤台中学第三学年所属の少女。アイドルのような改造制服に身を包んでおり、喋り方も一昔前のアイドルっぽい。いつも見えてるここ学園都市に七人しかいない超能力者の一人で、第五位。能力名は《心理掌握》である。

希望は操祈を押しのけるように、ガバッと立ち上がった。

「毎度毎度……何の用なんだよ？」

「別に、用なんてないよ？ ただ、毎朝ノゾミンの様子を見に来ているだけなんだよねえ。ほら、ノゾミンは私の生活力なんだつ「意味が分からん。それと、ノゾミンって言つのはやめる。俺の名前はノゾムだ」

「ええー？ だつてわあ、漢字で書いたら《希望》なんじやん？ そんじや、やつぱりノゾミンが正しい読みだよお」

「うつむかご。とにかく、用がないならさっさと帰れ。お前も学校があるだろ？ が」

パンパンと服に付いた埃をはたきながら言つた希望。ひきこもりといつても過言ではない生活を送っている希望だが、これでも一応教師なのだ。しかも田の前の少女は実の教え子。見逃すわけにはいかない。

希望の教師お決まりの言葉に、操祈は一やりと妖しく笑うとこんなことを言い、希望に抱きついた。

「もあ、そんなに怒らないでよあ……お兄ちゃん」

「……っ！」

ボンと顔を真っ赤にする希望。操祈程の美少女に抱きつかれたからというのもあるが、最大の理由は『呼び方』のせいである。

前世や転生の際に妹といろいろあつた希望。その名残か影響か、詳しい原因は分からぬが

天翔希望は某金髪サングラスもビックリなほどシ妹依存症候群スコンなのだ。

操祈は見事にこの弱点を突いた。ちなみに希望は微塵も知らないことだが、この弱点は意外と常盤台内で広まってしまっている。そのため希望に怒られそうになつたり、非常に稀な事態だが、希望をオトそうとするときには「いつやつて呼ぶ」ことが常盤台中生徒には当たり前となつてゐるのだ。

希望は茹蛸のように顔を赤く染めながらすっかり裏返つてしまつてゐる声で叫んだ。

「き、急に何を言つんだこのバカ！ お前は俺の生徒だらうが！妹なんかじゃ決して、断じて違う？」

「それはそただけど、私にとつてノゾミンはお兄ちゃん的な存在というかあ……ねえ？」

「『ねえ？』じゃない！」

操祈のノリに肩でゼーゼーと息をしながらツツ「ミ」を入れ続ける希望。毎度のことながら相変わらず手玉に取られていくようである。……と、そんなとき。

『どつこでもいいな やつれたらいいな

』

何か聞き覚えのある気がする着うたが室内に響き渡る。

希望は、助かつたとばかりに携帯電話へと手を伸ばし、通話ボタンをプッシュした。

「も、もしもしー、天翔ですー！」
「…………つち

操祈が腕を組みながら舌打ちしたのはあえて触れないでおく。電話の相手は特徴的な間延びした声で話し始めた。

『あ、のぞむー、元気？ 私だよ、私』
『…………すみません、振り込め詐欺に知り合いはないのですが……』
『のぞむー？ そんな悲しい反応されるといつちも相当困るかもー。』
「冗談だよ…… インデックス」

狼狽している通話相手にやや苦笑を浮かべる希望。しかし、心の奥では久しぶりに声を聴いた同僚に懐かしさを覚えていた。インデックスと呼ばれた相手は嬉しそうな声色で言葉を続ける。

『のぞむはやつぱり相変わらずかも…… そっちの暮らしはどう？』
『まあまあかな。教師やるのもなかなか楽しいし、魔術から離れられるつていうのも新鮮だしね』
『むう…… のぞむはやつぱり捻くれ者かも…… 魔術嫌いめ』
「冗談だつて」

懐かしい掛け合いに希望が楽しそうに笑う。インデックスも電話越しにではあるがクスクスと笑っていた。

『…………やつや、本題を話せなきゃ』
「今更かよ」
『そんなこと言つむやダメだよ、のぞむ。…… 今、学園都市の近く

にこるんだけじゃ、久しぶりに四人でお茶しない？ かおりもいる
しわ』

「なんで神裂の名前が出るのかが知らんが……まあ、いいんじゃな
いか？ 旧友とも昔の話をしたいしな」

『相変わらず年寄りみたいだよ、のぞむ』

電話の向こうでインテックスが『あはは……』と苦笑している。
希望は軽く返事を返しながらも、旧友と会える喜びに体を染めてい
た。

『それじゃ、十分後に門に迎えに来てねー』

『了解。んじやな』

会話を終え、ピッと通話を終える。

そして希望は壁に掛けてあるジャケットを手に取りながら操祈に
告げた。

『といふことで俺は出かける。お前もとっと学校行けよー』

『えー、ノゾミンと一緒にいたいよお』

『我儘言つな。それじゃあな』

ブーたれる操祈を残し、部屋を出る希望。操祈はそれから少しの
間その場に立ち尽くしていたが、流石に暇だったのか、鞄を持ち早
足で部屋を出て行った。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）（後書き）

感想、お待ちしています。

第一話 御坂姉妹（シスターズ）（前書き）

「んにちは。

やつとこ超電磁砲のロボを「ン」した、ふゆいです。
ああ見るやー…………明日から後期補習ですが。

…………それでは、お楽しみください。

第一話 御坂姉妹（シスターズ）

希望が操祈から執拗なまでのアプローチを受けていた頃、御坂未来は義姉の美琴と共に常盤台中学へと足を進めていた。

「今日もいい天気ねー。」こんな口は退屈な授業なんか受けずに外で思いつきり遊びたいわー」

「お姉様はレベル5ですから、授業を受ける必要なんかないと思つのですが……」

美琴の発言に、呆れた表情をみせる未来。

約160万人の能力者が集うこの学園都市のベストセブン。美琴はその中でも第三位を誇る実力者だった。

「でもさ、あんたも頑張れば私みたいになれるんじゃないの？ 仮にも私のクローンなんだし」

美琴が空になつたシークワーサーサイダーの缶を咥えつつそんなことを言い始めた。

確かに、未来は御坂美琴のDNAマップを元に作られた軍用クローンの試作機だ。理論的には美琴のようになれるとも言われている。

しかし

「所詮、私はクローンですから。お姉さまのよつた完全な超能力者になるなんて無理なんですよ」

そもそも、美琴がレベル5になつたのは彼女が努力した結果だ。いくら未来が美琴のコピーだとはいっても、彼女の努力の過程まで

を「アーティー」できるわけではない。

未来の少し残念そうな表情を見て、美琴は、しまった、とこいつよ
うに右手で顔を覆つた。

（あひやー、少し無神經だつたかなー…………よし、ijiはお姉
ちやんらしく、元気づけてやるつー）

よつしゃ、と意氣込む美琴。このよつやな切り替えの良さも、彼女
をレベル5という頂きまで押し上げた要因かもしれない。

美琴は「ふふふ」と某風紀委員のように妖しく笑うと、未来に身
体を寄せ付けた。

「わうえばせ、未来」

「はい、なんですか、お姉様？」

美琴の呼びかけにキョトンと首を傾げる未来。そのあまりにも可
愛らしい仕草に、美琴は思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたが、
すんでのどこいりで踏みどまり、言葉を続けた。

「あんた、アーティーと、じつ思つてこるわけ？」

「？ 希望、ですか……？」

突然の質問に未来が頭にハテナマークを浮かべる。ちなみに、『
アーティー』といふのは希望のことだ。

世界中を飛び回っている美琴の父、旅掛がイギリスに立ち寄つた
際、身寄りのなかつた希望を引き取つたのである。それから、美琴
は希望のことを『アーティー』と呼ぶよつになつたのだ。

美琴は未来の耳元に口を近づけると、小さな声でボソリと囁つた。

「ぶつちやけ、あんたアーティーと好きなの？…………異性として」

「ふはつ」

いきなりの爆弾に、激しく咽る未来。その顔がリングのように真っ赤に染まっているのは、見間違いではないだろう。

「き、急になにを言い出すんですかっ」

「あれ、違うの？ てっきりゾンコンなのかと……」

「そ、そんなわけないじゃないですか！ 私と希望は仮にも義兄妹なんですよーー？」

「あくまで、『仮にも』だけどね」

「うつ……」

美琴の適確な指摘に、未来が黙り込む。

実のところ、未来は希望に好意を抱いていた。それは、実験動物として死を待つのみだった自分を助けてくれた恩人だからというのもあつたが、一緒に暮らしているうちに、彼の優しさに惹かれていつたというのが大きな要因だろう。

未来の沈黙を肯定ととったのか、美琴はニヤニヤしながら未来の肩にポンと手をかける。

「…………お姉様？」

「未来……」

「はい、なんですか？」

不思議そうに美琴を見る未来に、美琴は輝かしいばかりの笑顔で言い放ったのだった。

「避妊はするのよ？」

「何の話ですか！」

常盤台中学、第一学年教室

「まつたく……お姉さまはいつもいつも……」

御坂未来は自分の机に突っ伏したまま、ムスッとした顔で窓の外を見ていた。

結局、あの後もずっと美琴に希望との仲を弄られ続け、最終的には『結婚式には呼んでもよねー』と、ずいぶんと先回りなことまで言われる始末。あのときの美琴の楽しそうな表情は、忘れてくても忘れられないだらけ。

「……確かに、希望は魅力的ですよ？ 優しいですし、心強いですし、何かと世話を焼いてくれますし……」

誰に話しかけるでもなく、ボソボソと呟く未来。それこそが恋する少女特有の行動といつことに、未来はまつたく気づいていない。そんなこんなで、窓の外に話しかけているときだった。

「み～ら～い～？」
「わひやあ～！」

未来の名前が呼ばれると同時に、突然何者かによつて背後から胸を鷲掴みにされたのだ。

「なつ、えつ、ちょつ……」

「おつはー、未来。今日も良い乳してゐねえ、うううう
「や、やめてください！ 晴香？」

未来が顔を真つ赤にして件の少女を制止する。晴香と呼ばれたそのボニー・テールの少女は、「ちえー」と言いながら未来に密着させていた身体を渋々離した。

妙場晴香。未来のクラスメートであり、自称親友である。

小麦色に焼けた健康的な肌と尻尾のよつにピヨコピヨコ跳ねるボニー・テールが特徴的な少女だ。ちなみに、陸上部に所属している。

能力名は『視覚阻害』。対象物を「見ている」という他者の認識を阻害し、「見えない」という認識にすり替えることができる能力である。能力強度は大能力者（レベル4）。

晴香は悔しそうに口を尖らせながら、頭の後ろで手を組んでいた。

「いいじやん減るもんじやないんだし……」

「そう言つ問題じやありません！ そもそも、いきなり人の胸を揉むのが異常なんです！」

「だつてさー、ミコつちやんのまな板と違つて、未来はこカツブじやん？ 中学生にしては揉みごたえがありすぎるんだもーん」

「り、理由になつてないですよー、胸の大きさは関係ないでしょう！？」

大声で否定しながら、慌てて周りを見渡す未来。周りから見ればおかしな行動だが、未来にとつては死活問題だつた。

(お、お姉様には聞かれてないですよね……?)

そう、胸に対しても度のコンプレックスを持つている義姉への恐怖である。

以前、「冗談半分に希望がそのことについて指摘したときのことを、未来はいまだに忘れられない。

美琴はまず、磁力を使って希望を壁に張り付けにし、彼の顔、ギリギリを砂鉄の剣で串刺しにした。そして、最後にはなんとあの『超電磁砲』を希望にぶつ放したのだった。

幸い、ギリギリで拘束から抜け出した希望が魔術を使って回避したのだが……下手すれば、彼は確実に閻魔大王のもとへと旅立つていただろう。

未来は美琴がいないことに安堵すると、呆れた表情で晴香を見た。

「晴香、あなたはもう少し落ち着きを持つべきではありますか? 仮にも、私達は常盤台中学生なんですよ?」

「むー、まあた未来はそつやつてマジメぶるう……ノゾムせんせーと同棲しているくせにー!」

「ふはっ」

未来、本田一一度のむせ返り。

まさかこんなところでいきなり希望との仲を暴露されるとは思つてもいなかつた。なぜ彼女がそのことを知つてゐるのかは甚だ疑問なところではあるが。

そして、晴香の失言と同時に、クラスメート達が未来の下へと集まつてくる。

「未来さん? 今のは、もう少し詳しく聞かせていただけませんか?」

「いや、その……委員長、そんな大袈裟なことじやありませんから、

皆さんと一緒に席へと戻られてくださいませ」

「

「妹さん！ 天翔先生ってプライベートじゃどんな感じなの！？」

「好きなタイプは？ よく見ているアイドルグループとかはあるの

？」

「希望先生の裸とか見たことはある？」

「え、いや、その、えと……」

突如として始まった質問攻めに、ただただ狼狽する未来。そんな彼女を楽しそうに見ながら、晴香は恍惚とした表情を浮かべていた。

「未来のその困っている表情……いいわあ……」

「晴香ああああああああああああああああ？」

私立常盤台中学。

今日もこつものよう、元氣な笑いが絶えなこつである。

第一話 御坂姉妹（シスターズ）（後書き）

なんだか未来のキャラが『妹達』とはまたく変わってきていますね。まあ、そのほうが人間らしくていいのですが。

感想などはじじじ送ってくださいね！ といふか、送ってくださいお願いします（泣）

それではまた次回お会いしましょう。

さよなら

第三話 神裂火織（プリエステス）（前書き）

「んにちは。

オリジナル展開つて難しいなあ……。

第三話 神裂火織（プリエステス）

学園都市、外壁北門

未来がクラスメイトから集団で質問攻めにあつてから数時間が経つた頃、希望は例の魔術師三人組を迎えて、北門へと来ていた。三分ほど待つたところで、目の前に見覚えのある人影が現れる。一人は、二メートルほどの長身で赤い長髪を持ち、頬にバーコードのような入れ墨を彫っている男。

その左には、全身がすらりとしていて、片方のジーンズの裾を太腿のところで切り取った格好のポニー テールの少女。

そして、男の右には、シスター衣装に身を包んだ、ちつこい女の子がちまつと立っていた。

三人は希望を見ると、笑顔で駆け寄つてくる。

「よひ」

希望は三人に軽く右手を上げると、いつもは無表情の顔をわずかに崩した。

ちつこいシスターが嬉しそうに希望の方へと走つてくる。

「のぞむ、ひっさしぶりだね！」

「さつき電話で話したばかりだろうが、インデックス」

「えへへ、それでも、久しぶりなんだよつ」

シスター……インデックスが、希望に頭を撫でられながら「いやへ～」とほおを緩める。

インデックス。原作では、103000冊の魔道書を頭に中に記憶している少女で、イギリス清教がその魔道書を守るために体の中

に『自動書記』を入れこまれていた。そのため、一年おきに記憶を消さなければならなかつたという悲劇のヒロインである。

もちろん、この世界においても彼女の立場は変わらなかつたのだが、原作知識を持ちうる希望によつて救われたのである。

希望に抱きついているインデックスを微笑ましそうに見ながらも、希望は残りの一人の方へと言葉をかけた。

「お前らも久しづびりだな。……スタイル、神裂」

「まったく……第一声目がずいぶんと簡素じやないか」

「スタイル、そんなことは言つものではありませんよ?」

同じよつに、笑顔で希望と接する一人。

彼らも希望によつて、原作のよだな悲劇から救われたのだつた。

しばらくの間、再会の喜びを分かち合う四人。

十分ほど経つたところで、希望が本題を切り出した。

「そんじや、ファミレスにでも行くか? 昼飯まだ食つてねえだろ?」

「ん、そうだね。イギリスを出てからまだ何も食べていしないんだ。もちろん、僕たちにご馳走してくれるんだろう?」

「けつ、現金な奴だな、お前。……まあいいや。ほら、とつとと行こうぜ?」

スタイルと馬鹿な掛け合いをしつつ、三人を誘導しようとする希望。

しかし、いや歩き出そつとしたところで、はた、とインデックスが足を止めた。

「どうした? インデックス

「……スタイル、私達は先にファミレスに行っておこうよ

「うん？……ああ、なるほどね。そういうことなら喜んで」「？一体どうしたのですか、一人とも？」

インテックスとステイルの怪しい笑いに、希望と火織が頭に疑問符を浮かべる。

そんな彼らを置いてけぼりに、インテックス達はいきなり一人で走り始めた。

「あつ、ちょつ……一人とも！？」

「かおりー、のぞむと話さなきやいけない」ことがたくさんあるでしょー？」

「せつかくの機会なんだから、一人は仲良く後から来てくれー！」
「おいおい、お前ら道分かるのか？」

「前と同じ店なんだろう？ それなら大丈夫さー！」

「といふことで……先に言つておくよー」

「ええつ！？ 待つてください、インテックス！ ステイル！」

火織の制止の声も聞かず、早々と去つてしまふ一人。

残された希望は、面倒くさそうに頭をポリポリと搔きながら、唐突に火織の頭の上に手を置いた。

同時に、火織の顔がボンッと煙を上げたかのように真っ赤に染まる。

「なつ……！ き、急になんですか！？」

「いや……なんか昔のことを思い出したもんだからさ。よくしてただろ？ これ」

そう言つて、希望が乗せた右手をガシガシと動かし、火織の頭を撫でる。

幼少の頃より魔術師として『必要悪の教会』で育てられてきた希

望。同じように、『天草式十字清教』で『女教皇』として、数々の重圧に耐えながらも生きてきた火織。

似たような境遇を持つ者同士のだからだろうか、『必要悪の教会』で出会ったときから、二人は親友のように意氣投合していた。……そのせいで、某金髪サングラスや『ゴーレム』使いからは『希望と火織はデキている』という根も葉もない噂を立てられてしまつたが。

火織は最初は顔を火照らせていたものの、いつしか気持ちよさをうに目を細め希望の好意を受け入れていた。

「まつたく……あなたはいつまでも変わりませんね」
「それはお互い様だ。そんな馬鹿長い刀、まだ持つてやがったのか」「べ、別にいいじゃありませんか！……別に……」

火織が背中に装備している『七天七刀』を見て、希望が呆れたようにはぐく。そんな彼の言葉に火織は少し声を荒げたが、すぐに表情を戻すと、背中の刀をそつと優しく撫でながら言つた。

「だつて……この『七天七刀』は、昔希望がくれた、大切な宝物なんですから……」

「…………そうかよ」

桃色に染まつた顔で嬉しそうに言う火織があまりにも可愛かつたためか、はたまた照れ隠しか、希望は火織の顔を直視できずにフイツと顔を逸らしてしまつ。

希望にしてみれば、いつも世話になつてゐるからというだけのなんでもない贈り物に過ぎなかつたのだが、……火織は随分と刀を気に入つてくれてゐるようである。

(……まあ、喜んでくれてゐるならいいのかもな……)

「希望？ 何か言いましたか？」

「……なんでもねえよ」

「？ は、はあ、それなら構いませんが……」

おかしな希望ですね、と首をひねる火織を横田で見つつ、はあ、と安堵のため息をつく希望。

……しかし、数分もたたないつひこ、彼は再び危機（人生級）を迎えることとなる。

「お？ もしかしてアーニキじゃない？ こんなところでなにしてんのよ？」

突如として後ろからかけられた聞き覚えのある声。

まさか……と首筋に嫌な汗をかきながらギギギギと壊れたおもちゃのようになります振り向くと、……。

「こんな昼間つからそんな美人さんとトーントーなんて、良いじ」身分じ

やない。ねえ？ アーニキ」

「の、希望……？ 一体何をしているのですか……？」

「……美琴、未来……」

片や嬉しそうに、片や動搖している様子の、御坂美琴、未来姉妹が希望を見ながら立っていた。後ろには白井黒子を始めとした『超電磁砲組』が群をなしている。

希望は、頭の中で必死に言い訳を考えながら、こんなことを思つていた。

（未来の顔、なんかすっげえ怖えんだけど……）

普段はのんびり屋で頭の回転が遅い希望ではあるが、美琴の傍ら

で顔を俯かせ拳を握り込みわなわなと震えている般若の様子ぐらいは手に取るようにはわかる。

数秒後、希望の頬に未来の渾身のブーメランフックが小気味よい音と共にクリーンヒットし、希望は人の身でありながら空を遊泳したのだった。

第三話 神裂火織（プリエステス）（後書き）

感想、お待ちしています

第四話 佐天涼子（レベル〇）（前書き）

こんにちは。絶賛体育祭練習中の、ふゆいです。
今回は割と短めなのかな？ 未熟な点は見逃してください。
それでは、どうぞ

第四話 佐天涙子（レベル〇）

数秒のバルーン状態を経て、希望が勢いよく地面に顔面から着地する。

人生に一度あるかないかの状況に目を回しつつ、彼は攻撃を繰り出した張本人に向かつてあらん限りの動搖と共に絶叫を放つた。

「い、いきなり何すんじやボケええええええええええええええええええ？」
「それはこっちの台詞です女たらしいいいいいいいいいいいいい？」

ガシツとお互いの胸ぐらを掴み相対する希望と未来。

まさに一触即発。某幻想殺しと最強超能力者の戦いのときを遙かに上回るほどの負のオーラが一人を包み込んでいる。

今の彼らには、いつものようなお互いを想う気持ちはない。あるのはただ相手をぶちのめそうとする闘争心だけだ。

どちらからともなく口を開き、飛び出していく罵声、罵声、罵声。まるで小学生ですね、と一人を見ながら呴いた火織だつたが、状況打破は不可能と判断したのか、同じようにボケーと突っ立つている美琴たちの方に避難した。そして、恒例の自己紹介を始める。

「初めてまして、希望と同郷の神裂火織と申します。いつも希望がお世話になっているみたいで……本人に代わってお礼申し上げます」
「へ？ ああ、そんなに畏まらなくていいわよ？ どうみても私の方が年下なんだし。もっとフレンドリーにいこう」

いつも通りの敬語で接する火織に、あははと笑う美琴。

初対面の相手にここまで碎けた対応を取ることができるといつのは、もはや脱帽ものである。

「私は御坂美琴。そんで、あっちが私の双子の妹の御坂未来。どっちもある馬鹿の義妹よ」

「……ということは、あなたはイギリスで希望を引き取つたあの男性の『子息』で？」

「『子息つて……まあ、そんな感じね。あ、ほら、黒子達も挨拶して」

美琴の後ろでポカーンとしていた三人が、彼女に促されて慌てて火織の前に出てくる。

最初に出てきたツインテールの少女はなんだかとてもお嬢様っぽいな、と火織はなんとなく思った。

「私は白井黒子と言います。常盤台中学一年生で風紀委員をしております。……お姉様の害虫駆除も、私の役目ですよ？」

おほほ、と優雅に笑つてゐる黒子だが、言つてゐる内容はなかなか怖い。

このツインテールは要注意ですね、と火織は心のメモノートにしつかりと刻み込んだ。

「初春飾利です。柵川中学一年生で、白井さんと同じ部署の風紀委員に所属しています」

ペコリと礼儀正しく頭を下げる初春。おそらく、この面子の中ではもつとも常識に溢れている彼女ならではの見事なまでに普通な挨拶だった。

「佐天涼子でーす。初春のクラスメイトをやつてしまーす。ちなみに『無能力者（レベル〇）』なんで、そこんとこよろしくお願ひします」

佐天がどこか斜に構えたような態度で自己紹介を行う。初対面の火織でも察することができるほど。彼女の行動は単純さに満ち溢れていた。

（……自分の能力に、コンプレックスを持つているみたいですね……）

「ここ学園都市は超能力者を育成するための機関だ。そのためか、能力が低いものに対してもそんざいな扱いが際立つてしまっている。彼女も、それに嫌気が差している一人なのだろう。

火織は聖母のような笑みを湛えて、佐天の頭を優しく撫でた。

「ふえ！？ ちょ、いきなりなにを……」

「……大丈夫です。あなたは無力なんかじゃありませんよ」「え？」

「確かに、この学園都市では能力のレベルで身分が決まってしまうような風潮が広まってしまっています。その美琴さんも、普段から持ち上げられたりしているはずです」

「それは……まあ、ね。面倒くさい話だけど」

「佐天さん。人間の本当の価値は、能力の有無で決まるような物じやありません。誰かを、周りの人を一人でも想うことができれば、あなたは誰よりも強い人なんですよ」

「……でも、力がないと人を守れないじゃありませんか」

「それは違います。力があるから人を守れるんじゃない、誰かを守りたいから、人は力を発揮するんです。あなたに、今、何があつても守りたい存在はいますか？ 自分の全力を以てして、守り抜きたい大切な人を持つていますか？」

「……それは……」

思わず、佐天が初春の方をチラリと見る。

希望と未来の仲裁に入っていた初春は、佐天の視線に気づくと、コツと笑顔を向けてきた。

再度、火織の方を向き直る。

「……はい、います」

「それでいいのです。もしも、彼女を守るための力が本当に欲しくなつたならあの馬鹿教師にでも頼むことをお勧めしますよ。彼はああ見えてもなかなかつらい過去を持つ人です。あなたがしつかりと自分の決意を伝えれば、彼は必ず、あなたに力を授けてくれるはずですよ」

「……そ、ですね。少し気が楽になりました。ありがとうございます」

火織の言葉に、「クンと頷く佐天。その顔にはどこか吹っ切れたような表情が浮かんでいた。

元気を取り戻した佐天は、いつもの明るい調子で初春の背後にそろりそろりと近づくと、

「うへへへいへへへはへへへるう？」

「きやあああああああああああああああああああああああ？」

いつものように、初春のスカートを盛大にめくり上げた。

突然の暴挙に、唯一の男である希望が、ぶはつと鼻血を吹きだしながら地面へと倒れ伏す。その顔にどこか達成感に満ち溢れていた。まさに、一片の悔いなし、というやつだろう。

当の初春は、顔を真っ赤にしながら佐天に詰め寄っている。

「さささ佐天さん！ いいいいいきなり何するんですか！ 希望さんにも見られちゃつたじゃないですか！」

「おお、ついのう初春。その思春期真っ盛りなおにじやの」的反応があたしにはドツボだよー！」

「だからってスカート捲る必要はないでしょお

？」

哀れ初春。中学一年生、若干十一歳にして自分の三角地帯を男に見せびらかしてしまつところの辱め。

容疑者佐天涙子は目に涙を浮かべながら腹を抱えて笑つてゐる。

第三者的視点で見ると、明らかにいじめっこだ。

「希望……もしかして中学一年生に欲情したんじゃないですよね……？」

「ま、待つんだ未来。あれは一般思春期男子にしてみれば極々当たり前の反応であつて決して初春に興奮したとかそういうわけでは

」

「問・答・無・用？」

「あやああああああああああああああああああああああ？」

火織の視界の端では、命を懸けた痴話喧嘩が繰り広げられているが、あのバカがそう簡単に命を落とすようなことは絶対にありえないで、放つておくことにした。

なにはともあれ、六人は無事に自己紹介を終え、友人となつたのである。

ちなみに、この後希望が火織にまで制裁を加えられたのは、言いつまでもない。

第四話 佐天凪子（レベル〇）（後書き）

感想、お待ちしています！

第五話 原作開始（オープニング）（前書き）

「んにちは。

禁書目録と超電磁砲大好き、ふゆいです。

今回はやつと、ついに、希望の魔術がお目見えです！
長かった……やつとの嘘が……！

それでは、お楽しみください。

第五話 原作開始（オープニング）

とある日曜日。

天翔希望は朝から御坂一行を伴って、街中へと出ていた。しかし、女子を連れ立つての休日だといつに、彼の表情は心なしか暗さを帯びている。

「畜生……せっかくの休みだつていうのに……なんで俺がお前達の遊びに付き合わなきやいけねえんだよ……」

「いやー、わざわざ「めんねー。やつぱア」キみみたいな社会人が一緒にいた方がなにかと便利でさー」

あはは、と希望の肩を叩きながら快活に笑う少女、御坂美琴。ちなみに彼女は希望とそこまで背が変わらない。美琴が160cm、希望が165cmである。

上から田線で自分を慰めてくる義妹に若干イラッとしたが、希望は溜息を一つついて事なきを得ていた。

「まあ、俺も銀行とか寄らないといけねえから別にいいんだけどさ……」

「銀行？」の前行つたばかりなのに、もつお金無くなっちゃったんですか？

肩を落とす希望の言葉に、未来が首を傾げながら喰いついてくる。

今日も姉と違つて恵まれた胸がとても麗しい。

しかし、知らぬが仏とはよく言つたもので、希望は額に青筋を浮かべながら、極めて冷静に言つた。

「……ああ、お前の馬鹿姉が上条と会つ度にビルを焦がしたり清掃

口ボをぶつ壊したり自動販売機を故障させたりしているからな……
親父たちがいない以上、保護者の立場の俺が弁償しないといけないってわけだ

「…………（フイツ）」

いたたまれない様子で希望から顔を背ける美琴。『常盤台のエース』なんて呼ばれてはいても、やっぱり年頃のお転婆娘といつ事実は変わらないようだ。

「それにしても……楽しみですね～」

「そうだね。なんていつたつて本場イタリア仕込みの特性イチゴケーキなんだもん！ 私達みたいな庶民じゃ到底手に入らないような逸品が、今日、私達の胃の中に！」

「…………お前ら、ケーキ」ときでどんだけはしゃいでんだよ」

そんな希望の後ろでは、柵川中学二人組が両手を顔に当てながら一ヤニヤと妄想を浮かべていた。

今回の彼女達の目的は、最近オープンしたイタリアスイーツ専門店。美琴が日ごろのお礼にと一人を誘ったのがきっかけだ。ジト目で一人を見る希望に、佐天と初春はそれぞれ文句を言つている。

「もあ～、そんなんだから希望さんは『女心が分かっていない』って言われるんですよー！」

「この前偶然会つたツンツン頭の人も言つてましたよ。『アイツは少女の楽しみが分かっていない鈍感＝ブチン男なんですよ』って！」

「よし。とりあえず落ち着け一人とも。後、佐天、お前からは少し詳しく聞かないといけないことができたからそこんところケーキ喰いながらよろしく」

あの野郎がつ殺す、と拳を固めて親友への虐殺フラグを立てる希望に、未来はやや類をひきつらせながらこの場にはいない『幻想殺し』の無事を祈っていた。

「ところで希望先生。 そろそろ銀行が見えてまいりましたの。 私達はここの大廣場でクレープでも食べて待っていますので、できるだけ早く戻ってきてくださいまし」

「ああ、悪いな、白井」

変態でありながらも、この中で一番常識を弁えている黒子に希望は軽く跪く気持ちさえ覚えてしまう。

しかし彼も一人前の教師。 そんなみつともない真似をこんな大衆の目の前で晒すわけにはいかない。

結局、唐突に湧いてきた感情をなんとか心の奥に押しとじめ、希望はよつやく見えてきた銀行の方に目を向ける。

「あれ……？」

が、あまりにも不自然な光景に希望は思わず足を止める。隣で佐天と楽しそうに喋っていた初春も同じものに気が付いたようで、可愛らしく首を傾げながら疑問を口にしていた。

「こんな日曜日の昼間からシャッターが降りているなんて……どうしたんでしょうか？」

「さあ？ 定休日か何かじゃないの？」

頭の後ろで手を組んでいた佐天がなんでもない様子で初春の疑問を軽くあしらう。

彼女達はその言葉に納得して、広場へと向かつて行つたが……

……希望は、頭の片隅に引っかかったままの既視感に頭を悩ませていた。

(「Jの展開……どこかで見覚えが……）

しかし、希望の思考はそこで強制的に中断されてしまつことになる。

突然、希望の耳に爆音が轟き、同時に吹っ飛んでいく銀行のシャツターが彼の視界に入ったのだ。

(爆発！？ こんな時間の、しかも銀行で)

その瞬間、希望の脳内に一つの映像が浮かび上がってきた。

『風紀委員ですのー』

『駄目えつー』

『発火能力……能力の上昇で少々調子に乗っているみたいですねわね』

『黒子お……ここからは私の個人的な喧嘩だから、あんたは手え出さないでよね』

(「J、これは……前世で見たアニメの記憶！？」)

『Jとある科学の超電磁砲』、第一話の展開。現在希望の身に起つてている状況は、まさにそれで起きた銀行強盗事件と瓜二つだった。

(どうする……？ おそらく、銀行の中にはまだ取り残されたままの人質達がいるはず……)

普通ならば、黒子達のような風紀委員ジャッジメントにや警備員アンチスキルに任せてくれればいいのだが……希望には、転生時に聖と交わした約束があった。

『絶対に、たくさんの人を救つてね……』

「…………畜生！」

考えるまでもなく、希望は銀行へと走り出す。彼が原作ストーリーに介入した瞬間だった。

一方、広場にいた美琴達も突然起こった爆音に驚愕していた。しかし、風紀委員である黒子と初春はすぐに我に帰ると、的確に指示を出していく。

「初春！ 今すぐ現在の状況を確認。人質と犯人の数、犯人の能力、レベルを調査後、本部に連絡を！」

「わかりました！」

「お姉さま達は危ないです下がってくださいです。ここからは私達の仕事ですわ。…………風紀委員ですの！ 一般人の皆様は速やかに広場に退避してくださいまし！」

迅速に事態の終結に向けて活動している一人。

状況に取り残されてしまった美琴と佐天、未来は三人で顔を見合
わせながらこれからどうするか話し合っていた。

「えーと……どうします?」

「どうするもなにも……黒子達に任せておけばこんな事件はすぐに
解決するだろうし。大人しく待つておきましょ?」

「それが妥当ですね。……あれ?」

「どうしたの? 未来」

はた、と動きを止めた未来に美琴が首を傾げる。

一人がじいっと未来を見つめる中、彼女はいきなりくるつと反転
すると、事件が起きている銀行に向かって、全力で走りだした。

「えっ、ちょっ……未来!?」

「き、急にどうしたんですか!」

「確かあの銀行には……希望が!」

未来が希望を助けに銀行へと走り出している時、希望は銀行内へ
と潜入し人質の解放に尽力していた。

「あ、ありがとうございます！」

「お礼はいいさ。それよりも、犯人は……」

「犯人達なら、あそこの裏口から……」

「サンキュー、後の人達の縄、解いてやつてくれよ
は、はい！」

聞いた通り、裏口から外に出る希望。犯人を捕まえようと意気込んで飛び立したが……。

「まつたく……あなたはいつもいつも一人で暴走しそうなんです。少しは自重して下さい」

「そうですの。いくら先生が一流の魔術師とはいっても、この学園都市においてはただの無能力者なのですから、独走は慎んでほしいのですの」

「未来……白井……」

犯人の一人の上に腰掛けている黒子と、隣で右手から光の粒子を放出している未来が呆れた視線で希望を見ていた。

二人の表情に一瞬縮こまつた希望だが、未来の右手を見た途端にボソッと真顔で咳く。

「未来……お前、能力使つたな？」

「はい。別に人通りもありませんし、だいたいこの能力は私に害を及ぼすような物じゃありませんしね」

「そう言う問題じゃないだろ……誰か頭のおかしい科学者に目え付けられたらどうするつもりだよ？」

そういうと希望は溜息をつきながら肩をすくめる。

ただ今話題に出た御坂未来の能力。原作通りの『妹達』ならば、レベル3の『欠陥電気』なのだが……未来の能力はこの学園都市で

も数えるほどしかいない『閃光使い（ライトニングマスター）』。
ちなみにレベル4、『大能力者』である。

これは、未来を救出した際に希望が脳を弄つて改変した能力。自分はクローンであるといつ認識から目を背けさせるために行つた処置の結果だ。

呆れかえる希望に、未来は優しい笑顔を浮かべながら身体を彼に預けつつ、言った。

「そのときは……希望が守つてくれるのでしょうか？」

「…………ちつ」

恥ずかしそうに眼を逸らし、ガシガシと頭を搔く希望。
なんだか桃色の空気を醸し出し始めている一人をジト目で見つつ、黒子は拘束した犯人を立たせ、大通りへと歩いていく。

「まったく、ＴＰＯを弁えて欲しいのですわ」
「す、すみません……」
「つたく、いちいちうるせえなあ……」

しかし、ここで希望が再び足を止めた。
何事が、と二人が希望の視線をたどると

『オラ！ ソイツから手を放しやがれよ！』
『だ、駄目っ！』
『ちつ！ しつけえ女だなあ？』
『きやあっ！』

小さい子供を庇い、犯人らしき男から暴行を加えられている佐天の姿があつた。

『佐天さん!』

未来と黒子が同時に佐天の名を呼ぶ。それに気づいた佐天は痛む身体を抑えながら、それでも笑いつつ、二人に顔を向ける。

「いつ……つう。あ、あはは……情けない姿、見せちゃったなあ……」

「そ、そんなこと……」

「救護班! こちらにも怪我人ですの! すぐさま避難を!」

一人が声を上げる中、希望はひたすらにギュッと拳を握りしめていた。

(……また、守れなかつた……)

傷ついた佐天の姿が、前世で守りきれなかつた聖の姿と重なる。そして、肉塊と成り果ててしまつた妹の映像さえもがフラッシュバックしてきた。

襲つてくる猛烈な吐き気に耐えながら、希望は確かな足取りで、車に乗り込んだ犯人の前へと立ちふさがる。

「アニキ、私もやらせてもらひわよ」

「ああ、好きにしろ」

希望の隣でバチバチと小さな稻妻を発生させつつ、ポケットからコインを取り出す美琴。それを横目に見ながら、希望は大声で『魔法名』を口にした。

「The mis666 (悪しき存在に正義の鉄槌を) ?

同時に、希望の左手にどこからともなく分厚い辞書のような本が現れる。

濃い緑の表紙に包まれたその本には、こう書かれていた。

神力全書

そして、希望は魔法を発動させた。

「神力全書、第一章『攻撃』第一節『範囲対象敵少數』第五項『地盤隆起？』『ヘルダンス』より抜粋！ 大地を操り、目の前の敵を空へと羽ばたかせよ！」

希望の左手に持たれた本から眩いばかりの光が放出される。瞬間、こちらに向かつて走つてきていった車の真下のアスファルトが車を宙に押し上げるようになに隆起した。

なつ！？

一 後は任せた、美琴！」

「オーケーアーキー！ これでも……喰らええええええええええええええ？」

空中に飛び上がり、身動きの取れない車など、美琴にしてみれば動かないのも同然。指の上にコインを乗せると、美琴は車に向かって音速の三倍近い速さで放ったのだった。

美琴の『超電磁砲』を喰らい、弾け飛ぶ車。

しかし、その残骸が凄まじいスピードで避難していた人質達へと降り注ぎ始める。

「あつ、 もばつ！」

「このバカ！ 後のことまで考えてやれよ！」

慌てて残骸を止めようと走り出す一人だったが

「お姉様、希望、少しは頭を冷やしましょうね？」

ギリギリで駆け付けた未来が光の粒子を広範囲で盾のようにな開して、残骸を全て受け止めていた。

「な、なんだアイツらは……！」

そんな三人の活躍を見ていた犯人の一人、黒子に拘束されている『発火能力』の丘原燎多が唇を震わせながら呟く。

その呟きを聞き取った黒子は、得意気にささやかな胸を張ると、言い放つたのだった。

「の方達は我が常盤台中学の誇る三人組。『常盤台のエース』御坂美琴お姉様。『常盤台の良心』御坂未来先輩。そして、『常盤台のG.T.A』天翔希望先生ですわ！」

事件は無事解決し、犯人達が護送車へと送られていく。

その中の一人、丘原に黒子が声をかけていた頃、希望は広場のベンチに腰掛け、ボーッと空を見上げている佐天の下に向かっていた。自分が近づいても気が付く様子のない佐天の頬に、希望はキンキンに冷えたヤシの実ジュースをピトツと密着させる。

「わひやあっ！ の、希望さん！？ いきなり何するんですか！」

「悪い悪い。なんか考え方していたみたいだったから、少し邪魔してみたんだよ」

「それって普通に考えて最低ですよね……」

ヤシの実ジュースを「コキュー」と飲みつつも、希望に返事をする佐天。いつの間にやらいつもの調子に戻っている自分に、佐天は少し驚きを感じていた。

「さつきはお疲れ様。格好良かつたぜ？」

隣に座り、缶のフルタブを開けながらそんなことを言つ希望。佐天はわたわたと両手を振りながら、全力で否定を開始する。

「そ、そんなことありませんよ！ 結局犯人に殴られちゃつただけですし……何の役にも立てませんでしたし」

「いや、お前は十分人の役に立つたさ。……ほら」

「え？」

希望がふと広場の入り口を指差す。

その方向に顔を向けた佐天は、驚いたよつて目を見開いた。

「お姉ちゃん！ さつきはありがとつー」

「本当にありがとうございます……もつなんでお礼を言つてよいか

……」

「い、いえ……そんなお礼なんて……」

ひたすらに感謝の意を述べる親子に、佐天は照れ臭そうにモジモジとしている。

一通りの会話が終わつたところで、親子は仲睦まじそうに広場を去つていった。

その姿を見送つていた佐天の肩を、希望は優しくポンと叩く。

「ほらな？ お前がどう思つているのかは知らないが、あの人たちにとつてお前はヒーローなんだよ。身を挺して自分を守つてくれた、誰よりも格好いい、そんな正義の味方」

「正義の……味方……」

希望の言葉を繰り返し、自分の拳を見つめる佐天。

彼女は昔から、誰かを守れるようなヒーローになりたかった。

超能力研究が進み、誰でも超能力を得られるようになった学園都市に来た時も、自分は絶対格好いい能力を身につけてやる、と意気込んでいた。

しかし、現実は佐天の心に重くのしかかる。

システムスキンの結果は、『無能力者（レベル0）』

お前には素質がない、と直接言われたような気がした。

それからは自分がみるみる荒んでいくのを肌で感じていた。

高位の能力者ははずるい。

どうせ低位の人達を見下しているに決まつている。
素質がない人だつて全力で頑張つているのに。

そんなことばかり考えていた矢先に、今、希望から褒められた。
そして、佐天の頭にこの前の火織の言葉が蘇る。

『もしも、彼女を守るための力が本当に欲しくなったならあの馬鹿教師にでも頼むことをお勧めしますよ。彼はああ見えてもなかなかつらい過去を持つ人です。あなたがしっかりと自分の決意を伝えれば、彼は必ず、あなたに力を授けてくれるはずですよ』

(……ああ、そうか)

火織の言いたかったことが、なんとなくわかつた気がした。

「……ねえ、希望さん」

「ん？ どうした？」

佐天の呼びかけに、返事をする希望。そんな彼を佐天はしつかりとした目つきで見つめながら、言った。

「私、力が欲しい」

「……」

「前みたいに能力にこだわっているわけじゃない。でも、やつぱり私は初春を、みんなを守れるような、そんな力が欲しいんです。だから

「

「……やれやれ、火織の言うとおりだな」

「え？」

あまりにも予想外な返事に、佐天はポカンと口を開ける。

そんな佐天を他所に、希望はバッグの中から一つの髪飾りを取り出した。

白を基調にした、桜の花のような形をした髪飾り。

「それは……？」

「ああ、これが？ 前にお前が火織と知り合ったときがあつただろ

？ そのときにアイツから頼まれていたんだよ。『佐天さん専用の靈装を作つてあげてください』ってな

「れい、そう？」

「靈装。よつするに魔法道具みたいなものだな。物体を憑代に魔術を使えるようにする装備。俺達が使う魔術みたいに、身体に直接負担が来るわけじゃないから、お前みたいな能力開発を受けた人間でも魔術が使えるつつスグレモノだ」

そして、希望はその髪飾りをすつと佐天の方に差し出す。

「これを……私に……？」
「だから言つたろ？ これはお前専用の靈装だつて。……氣に入らないか？」
「い、いえ！ そんなことないです！ ……ありがとうございます、『じぞいます』」

希望から髪飾りを受け取る。手に取つた瞬間、何か温かいものが佐天の身体から髪飾りに放出されたような感覚がした。

「今は……？」

「佐天の魔力が髪飾りに登録されたんだよ。人間つてのは個人差はあれど誰でも魔力を持つてゐるもんだ。今の様子を見る限りじゃ お前は結構な量の魔力を持つてゐるみたいだぞ？ 素質があるな」「素質がある……？」

「ああ、少し頑張れば一流の魔術師になれるくらいの魔力だ」

「『じぞ』と希望が笑いかける。それに何を思つたか、佐天はしゃがみこむと突然顔を抑えて泣き出し始めたのだ。

突然の事態に希望はオロオロと狼狽している。

「お、おい、どうしたんだよ？」

「『ごめんなさい』……私、嬉しいくて……」

「嬉しい？」

「はい……今まで誰にも認められたことなくて。先生にも気を遣わ

れてばかりで。初春にも迷惑ばかりかけちゃって……でも、今希

望さんが私のことを認めてくれて……私、私……」

「やつか……今まで、よく頑張ってきたな。佐天」

そして、ぎゅっと希望が佐天を抱きしめる。それに一瞬佐天は顔を真っ赤にしたもの、気持ちよさそうに目を細めると、自分も希望の背中に腕を回し、彼の肩にそつと顔を乗せた。

「涙子、ですよ。希望さん……」

第五話 原作開始（オープニング）（後書き）

今回から次回予告を入れたいと思います。

佐天（以下：佐）「いやー、今日は私と希望さんとのアシアツ展開が見物でしたねー」

未来（以下：未）「そ、そうですねえ……で、でも、希望とアシアツなのは佐天さんだけじゃありませんよ……？」

美琴（以下：美）「あら。じゃあ未来は希望とはもっとアシアツでラブラブってわけね？」

未「は、はいっ！？ お姉様！ 突然何を

佐「さて、次回は日常パート！」

美「私と黒子、初春さんの腰に嵌められた未来は希望とパートをすることに」

佐「しかし！ そんな仲睦まじい一人の様子を私が許すはずもなく……つて、なんですかこの台詞！ 私ただの嫉妬に燃える醜い女になつてますけど！？」

美「どこからか噂を聞きつけた常盤台生徒達も邪魔をしようつと、食蜂先輩の指示のもと妨害を繰り返していく！」

佐「次回も楽しみですね！ というわけで、次回！ 『アーストデー』『義理兄妹』」

美「次回もお楽しみにね！ 感想も待ってるわよ」

未「つて、ちょっとおおおおおおおお？」

第六話 義理兄妹（ファーストストーリー）【前編】（前書き）

いよいよ。

今回は前、中、後の三回に分けてお送りしたいと思います。

それでは、お楽しみください

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【前編】

「おー、流石は学園都市が誇るアミコーズメントパーク。迫力が段違いだな」

「…………」

「あそこにあるのはジェットコースターか？ なんか角度が直角超えているんだが、セキュリティは大丈夫なんだろうな？」

「…………」

「観覧車もでけえなあ！ 一周何分かかるんだよ！？」

「…………」

（どうしてこうなったんですかね…………）

隣で騒ぐ馬鹿義兄を無言で見つめ、『フルチューニング完全調整』こと御坂未来は密かに溜息をついた。

今、彼女達は学園都市でも有数のアミコーズメントパーク、『スクールタウン』に来ている。

この『スクールタウン』は、学園都市の一学区をまるまる使って建造された、いわゆる観光都市である。ショッピングモールは勿論のこと、遊園地、映画館、スポーツジム、レストラン街……などなど。若者がデートをするときに必要な設備が素晴らしいまでに揃っている、まさに『生徒たちの街』なのだ。

未来も美琴と共に何度か来たことがあるのだが、今回は色々と複雑な事情によつて、希望と来てしまつていた。

（ぐ、これも元はと言えばあの馬鹿お姉様のせいなんですね…………）

ギュ～と渾身の力で拳を握る未来。

彼女は子供のようにはしゃぐ希望を他所に、昨日のことと思いつ出していた。

昨日の土曜日。

授業が半ドンで終了したため、未来はいつものメンバーと共に行
きつけのファミリーレストランに来ていた。

「」注文はお決まりですか？」

「あ、私はデラックスクスダイナマイドストロベリーパフェで」

「私は「ココアですの」

「私は……「一ラかな。未来は？」

「私は白井さんと同じで」

「じゃあ私はメロンソーダお願いしま～っす

「……ふう。それにしても、最近なんか忙しいわね～」

注文を終え、いかにも疲労の色を見せるように肩を鳴らす美琴。

冗談めいた言葉だが、これがまた的を得ているのである。

「この前の銀行強盗事件から一週間が経っているが、この一週間の間におよそ十件もの事件が起きている。どれも、能力者による犯行だ。

「お姉様は自業自得ですの。いつも避難していください、って言つておりますのに、自分から事件に首突つ込んでばかりで……」

「う。ま、まあそれは私の性分ってやつよ……あはは……」

「誤魔化しても駄目ですの」

田をキヨロキヨロと泳がせながら黒子の言葉を交わす美琴に、黒子は若干溜息をつきながら美琴を睨んでいた。

「そういえば……最近は佐天さんも事件に介入するようになつてきましたね」

「あ、初春さんもそう思いました？ なんかこの前の銀行強盗事件から、すく明るくなつたみたいに魔術みたいな能力を使つて……あれつて、希望がなんか関わっているんですか？」

「え？ あーはい。事件の後にいろいろあって……希望さんから靈装つていう魔法具みたいなものを貰つたんですよ。ほら、これがその靈装で」

そう言つと佐天は髪留めを外して自慢げに机の上に置いた。桃色の外殻が蛍光灯の光を浴びてなんとも不思議な輝きを放つてゐる。

「へえ……アイツもなかなかセンスあるじゃない」

「どうやって使うんですの？」

「使い方、つていうか……なんか『こういう風になれ』って念じたらその通りに力が出るんですよ。能力みたいな演算もいらないから、私みたいな馬鹿には心強い味方なんです」

「でも、佐天さんの元気が戻つて良かつたですよ。ね、未来さん

？」

「…………

初春が声をかけるが、それには気付いた様子を見せずじいと髪留めを見つめている未来。

そんな彼女の様子に美琴は「はは～ん」と妖しく口の端を一タマツと上げ、耳元でおおと呟いた。

「未来……もしかして、大好きなアニメからそういう贈り物を貰つてないことが悔しかつたり？」

「は、はいっ！？ い、いきなり何を言いだすんですかお姉様！ そりや私だつて長年の付き合いなんだから贈り物の一つや二つ貰いたいな」とか思うときはありますけどそんなことでいちいち悔しさを感じたりとかそんな俗物てきな考えは微塵もありませんしあのやの

「うわあ、思わず引こちゃうくらじお約束な反応が来ちゃいましたね」

「もう、未来つたら可愛いんだから お姉ちゃんの包容力でナデナデしちゃうぞっ」

「お姉様キャラが変わつてますの食蜂先輩が乗り移つてますの

赤くなつて縮こまる未来のあまりの可愛さに我慢できなくなつたのか、シスコンの兆候を見せつつある美琴がキャラ崩壊もなんのそのと言つた様子で髪の毛をわしゃわしゃと搔き乱している。

そんな騒がしい中、一人静かに黙りこくつていた初春が、突然「そうだ！」と叫び、立ち上がつた。

「良い考えがありますよ未来さん！」

「あ、あの……目がなんか怖いですよ初春さん。とりあえず、ほ、ほら、落ち着いて……」

「そんなこと言つている場合じやありませんよー。」これは未来さんと希望さんの仲を进展させる作戦なんですからー。」

『…………ほほお』

「は、はあつー? いきなり何言ひあやつてんのよ初春! 別にそんなの必要ないでしようが!」

「そ、そんなことはありませんが……別にわざわざ初春さん達の手を煩わせなくともとこいつか、なんといつか……」

自分にとつて向かい風になりかねない提案に必死に拒絶の意を示す佐天と俯いて「こによこによと咳いている未来。

…………そして、初春の提案に一人顔を合わせて「うふふ……」と気持ちの悪い笑みを浮かべているのは、我らが常盤台のエースとその梅雨払い。

初春は満足そうに頷きながら、言い放つた。

「明日、お一人にはデートをしてもらいましょう!」

『ぶはつ! で、でーとー?』

「はい スクールタウンで、恋人のようにイチャイチャとしてもらうんです!」

『そ、そんなことする必要が……ムグウツ! ?』

「初春。その話、詳しく聞かせていただきたいですの」

「どういう風な流れ? 作戦は? やっぱ制服じゃないとダメなのかなあ?」

抵抗しそうになつた二人を女子中学生とは思えない綺麗な絞め技で拘束する美琴と黒子。隣で佐天が泡を吹き始める中、未来は冷静にこんなことを思つていていた。

(…………ああ、絶対にか面倒なことになるんでしょうね…………)

結局、その『データ計画』。通称『いつまでも進展しない義理兄妹をさつさとくつつけちゃおつ』。作戦は、本人の許諾は一切ないままオペレーションスタートとなってしまったのだつた。

第六話 義理兄妹（ファーストテート）【前編】（後書き）

感想、お待ちしています

第六話 義理兄妹（ファーストニー）【中編】（前書き）

「んにちは。

禁書の第三期、もしくは超電磁砲の第一期、早く始まりませんかね
え……。

それでは、じつめ

第六話 義理兄妹（ファーストホールド）【中編】

（まつたぐ……どうしたものですかね……）

未来は子供のよつてまほしゃいでこる希望の隣を歩きながら、はあ、と溜息をついた。

現在彼女達はスクールタウンの中心街、『遊覧の街』を歩いている。

ここ遊覧の街は様々な店が立ち並ぶ、いわゆるショッピング街。洋服店は勿論、ゲームセンター、あらうことか「コンビ」まである学園都市随一のバリエーションを誇っているのだ。

教師職が忙しい（？）希望は学園都市に来てから一度もここに来たことがないため、こんな年甲斐もなくテンションを最高潮にしているのである。

「な、なあ未来！ あそこのゲームセンター行つてみねえか？ 僕ゲームセンターつて一回も行つたことねえんだよ！」

「はいはい。構いませんよ。今日は希望の行きたいところに行きましょうね」

「マジか！ よつしゃー、今日は小遣いもたんまりあることだし、遊びまくるぜー！」

「あ」

そう言つと希望はぐいと未来の手を握り、引っ張り始める。

そんな普段は見せないような希望の表情と行動に、未来は呆れな

がらも、わずかに楽しそうに嘆息した。

（……ま、こんな喜んでくれるなら、嵌められた甲斐もあつたつて
ものですかね。お姉様、一応感謝しておきますよ）

「ほら、早く行こうぜー！」

「ちよ、そんな急かさなくてもちゃんと行きますつてー。」

未来の口元には、自然とした笑みが浮かんでいた。

（ちっくしょー……未来さん希望さんとイチャイチャしやがつてえ
ーー）

そんな恋人よろしく手を繋いでいる未来と希望を悔しそうに歯ぎ
しりしながら見ているのは、我らが魔術師見習い、今日も身体の成
長が著しい佐天涙子である。

結局なし崩し的に初春達三人の作戦を見過ごしてしまった佐天だ
が、希望が気になり始めている彼女がそんな簡単に未来の進展を見
過ごすはずがない。

結果、せっかくの日曜日にも関わらず、佐天はわざわざスクール
タウンへと赴き、一人の後をつけていたのだ。

（それにしても……希望さんホント子供みたいな顔してるなあ……。
そんなにここに来れたのが嬉しいのかな？ あの人忙しそうだしな
）……常盤台の特別講師は伊達じやないってことか）

希望と知り合つて早一か月が過ぎようとしているが、佐天は情報収集に力を入れ続けていた。今の彼女は自称『天翔希望オタク』ち
言い始めるほど、希望についての情報を手に入れていた。学園都市の個人情報保護システムは、果たしてどうなつてているのか、甚だ疑問なところである。

佐天がそんな風に一人を監視していると、不意に後ろからトントンと肩を叩かれた。

（はて、誰だろ？）

頭に疑問符を浮かべながら、後ろを振り向くと、

「はあい あなた、佐天涙子さんでしょ？ ちよろ~つと話があ
るんだけど、ちょおつといいかなあ？」
「あ、えと……誰ですか？」

いきなり目の前に現れた金髪の少女に戸惑いを隠せない様子の佐天。

あくまで彼女視点だが、結構の美少女である。スタイルもおそらくモデル並みにいいのである。ふくよかな胸とキュッとしまった身体がなんとも健康的な雰囲気を醸し出している。

そして、着ている制服を見る限り、常盤台中学生である。ベージュ色のサマーセーターが、彼女の金髪にとてもマッチしている。少女は、「あつ、いけない。自己紹介がまだだつたわねえ。
ま、許してねえ」と一ぱつと笑つた。本当にアイドルのようだ。

(……なに、この人。なんかめっちゃイタイんだけど)

佐天の脳内で『アホの子』認定されかけていたことなどまったく気にもかけない様子で、少女は胸に手を当てながら、自信満々に言った。

「私は食蜂操祈。常盤台中学の三年生で、一応超能力者なお。学園都市的な序列で言うなら、第五位かなあ？ 能力名は『心理掌握』。よつろしつくねえ……ま、私の存在力にかかれればあなたの記憶から消え去っちゃうなんてことはないだろうけどねっ」「は、はあ……つて、レベル5！？ 第五位！？ 心理掌握つて……！ め、めちゃくちゃ有名人じやないですか！ あ、握手とかしてもらつてもいいですか！」

「ふふつ、勿論 あなたも私の魅力にクラクラつてね」

自称『ノゾミン』は私のモノなんだよお』の食蜂操祈である。しかし、常盤台最大派閥のお嬢様がなぜこんなところにいるのだろうか。

佐天は輝く瞳で握手を交わしながらも、そんな疑問を抱いていた。そのとき、不意に食蜂が「ふふつ」と笑みを浮かべる。

「あなた……今、『なんでこんなお嬢様がこんなところにいるんだろ？』って思つたでしょ？」「

「！ な、なんで私の考え方……？」

「私は精神系能力の最高位なのよお？ そんな私の読心力の目の前じゃ、どんな人も隠し事なんて出来やしないわつ」「す、すごい……？」

食蜂の『心理掌握』の凄さを確認し、改めて感嘆する佐天。彼女

の反応に満足したのか、食蜂は「あはは！」と豪らかに笑った。

「それじゃ、本題に入つていいかなあ？」

「本題？　ああ、つていうか、そもそもなんで私なんかに声をかけてきたんです？　自分でこんなこと言つのもなんんですけど、私無能力者だし、食蜂さんが声をかけたくなる理由がないと思うんですが……」

「それを今から説明するのつ。よおく聞いてねえ」

「あ、はい……」

「まず最初に確認するんだけどお……あなた、ノゾミンに『ふ』があるわよねえ？」

「はえつー？」

突然の直球な質問に、佐天が顔を真つ赤にして動搖する。そして「いやいやいや！　そんなことは！」と抵抗を試みたが、

「隠しても無駄よお？　さつき言つたでしょ？　『私の前では隠し事はできやしない』つて」

「う……」

「ど、こいつ」と、あなたはノゾミンの「どが好きつて」と、F

A？」

「ふあ、ふあいなるあんせー……」

「よろしい　それじゃ、話は早いわねつ

「は、話？」

「うよつ、と食蜂が偉そうに胸を張る。それと同時に、自己主張の激しい双丘がふよんと揺れた。

（くつそつ……やっぱ大きいなこの人……）

女の武器のあまりの性能差に絶望しかける佐天。そんな彼女の反応に気付き、楽しそうに笑う食蜂だったが、それはスルーして、彼女は口を開いた。

「あの二人。今データ中なんでしょう？」

「あ、はい。御坂さん達の作戦に嵌められて……みたいな感じで、そうなつちゃつてますね」

「やっぱりねえ、私の推察力に狂いはなかつたわ」

「はあ……で、あの、話とは……」

「ん、そうだつたわねえ……」

「私達と協力して、あの二人の邪魔をしてみない？」

「…………」

「ん？ どうした未来。急に身体を震えさせて」

「い、いえ……なんか、突然身震いするような寒気が……」

「大丈夫か？」

「は、はい。風邪とかそんなのじゃないみたいですね。とりあえ

「早く行きましょう」

「ん。 そうだな」

（どうかで誰か噂でもしているんですかね……？）

いきなり襲ってきた悪寒に、未来は軽く自分の身体を抱く。なにか自分を狙っているような感覚だったが……、

（ま、そんな大事な話じゃないでしょ！）

そう思い、頭の隅に追いやった。

相変わらず繋いだままの右手を幸せそうに見て、そのままゲームセンターへと入っていく。

「おお……ここがゲームセンターか……！」

「希望、そんなに目をキラキラさせないでください。一緒にいる私が恥ずかしいです」

「だ、だつてよお、こんな世界の楽園のような場所があるんだぜ！？ 俺は今猛烈に感動している！」

「わ、分かりましたから！ どこの第七位みたいな反応はやめてください！」

放つておいたらそのまま成仏するのではないかと思わず未来が心配してしまうほど、幸せそうな表情をする希望。周囲の生暖かい視線に顔を真っ赤にしながらも、未来は必死に義兄を止めていた。

「……ん？ どつかで見たことあると思つたら……希望じやねえか

「お、ホントだにやー」

「珍しイヤツが来たもんだなア」

「おーおー、久しぶりですなー」

「……お前らかよ」

突然声をかけてきた四人の面子に、軽くため息をつきながら希望が反応する。

そんな彼の様子に、ホスト風な少年が楽しそうに笑い、バンバンと希望の肩を叩いた。

「おいおい冷たいじゃんかよ、希望！ 僕達に会えて幸せだろ？」「黙れこのクソメルヘン。ヘンゼルとグレーテルに菓子でもあげてろ」

「誰がメルヘンだコラ！ 垣根帝督だつづのー！」

帝督と名乗った少年が大声で希望の罵倒に答える。

垣根帝督。ここ学園都市の第一位に位置する、最強の超能力者である。能力名は『未元物質』自分の想像した通りのものを作り出す、いかにも非常識な能力だ。ちなみに彼の決め言葉は『俺の未元物質に常識は通用しねえ！』だつたりする。

「そしてなんでお前はこんなところにいるんだよ」

「つるせエよ。バ垣根と上条に無理やり連れてこられたんだって」

「お前つてホント押しに弱いよなー」「放つとけ」

面倒くさそうに頭の後ろを掻いているこの少年は、一方通行。

垣根帝督の上位。つまりは学園都市での最強に君臨する、第一位の能力者である。

彼の能力は自分の身体に触れているすべての物質のベクトルを操るというもの。つまりは、核兵器も効かないような、まさに『最強』の超能力者なのだ。

「んで、バカ一人、と」

「くくんなよ！ 悲しいだろうが！」

「そうだぜい。 オレは基本的に個性に溢れてるんだから、そんな扱いは納得できないにゃー！」

希望の発言に全力で否定するツンツン頭の少年と金髪サングラスアロハシャツの少年。上条当麻と土御門元春だ。

二人とも能力指数はレベル〇の無能力者だが、それぞれが変わった能力を持っている。

上条の右手には『幻想殺し』という、それが異能の力であれば魔術だろうが超能力だろうが神の奇跡であるうが打ち消してしまって、ある意味で最強の力が宿っているのだ。ちなみにこれのせいで、彼は美琴から追われているのだが……そんなことは希望の知つたことではないため、いつもスルーされている。

そして土御門。彼は学園都市の学生でありながら、希望と同じ『必要悪の教会』に所属する、魔術師でもある。元々は陰陽師の最高位だったのだが、学園都市にスパイとして潜入した結果、能力開発によって満足に魔術を使えなくなってしまったのだ。しかし、能力開発によって発言した、レベル〇の『肉体再生』によつて、無理をすれば何回かは魔術が使えてしまうというなんとも肉体に優しくない状況になつてしまつていて。

偶然にも遭遇した四人組に、希望はただただ溜息をついていた。

「あ、あの……この人たちは……？」

そんな中、未来がおどおどしながら一人……一方通行と垣根を指差す。上条は美琴関係で、土御門は希望関係で既に知り合つていて、未来は残りの一人だけを確認したかつたのだ。

「ああ、未来は初対面だったな。……この白いモヤシが、学園都市

第一位の一方通行。んで、こっちのヤクザが第一位の垣根帝督だ

「だれがヤクザだ、だれが！」

「愉快なオブジェになりてエ様だなア！ 希望クウウウウウウウ

ウウウン！？」

能力解放します、といわんばかりの勢いで希望に詰め寄る一人。実際最強に位置する一人なのだから、なかなかシャレにならない事態ではある。

流石に危険を感じた希望がとある禁術（女の子を紹介する）で、なんとか一人を沈めたのだが……。

「そりいや、そこの君は希望の妹さんか？」

垣根が、未来についての質問を始めたのだ。

同時に、土御門と一方通行の肩がピクッと反応する。

あー、やばいなー……と希望が心配する中……、

「あ、はい。一応義理の妹つていう感じです」

「ほほオ……そんな羨ましい関係を持つてたのか、テメエはア……

「相変わらず、憎たらしいやつだぜい……」

「ちょっと待て。一方通行はともかく、なんで土御門までキレてんだよ。お前だつて同じような境遇……」

『問答、無用！』

「なぜだああああああああああああああああ？」

一人が、キレた。

モテない男達の僻み、といえばそれだけだが、この一人の僻みは本当にシャレにならない。

片や学園都市最強。片や暗殺術を極めた陰陽師。

（絶対死ぬって！）

やつと思ひや呑や、希望は未来の手を掴み、ゲームセンターから脱兎の如く逃げ出したのだった。

「ま、待ちやがれ！」

「覚えておけよ、希望！」

背後から降りかかる呪詛の言葉に、未来が思わず鳥肌を立ててしまつたのは、致し方ないことだろう。

第六話 義理兄妹（ファーストステート）【中編】（後書き）

感想、お待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6835t/>

とある魔術の転生者

2011年10月9日21時40分発行